

せいしやう 1227 たち 1378P
清澄 立ち上る 2611P
いこと 2630P モモ

845P
854P

2,612P

846P 2/2 国
854P 7/2 1/1 行

武内 藤津彦 仁佐聖后

53-214P 215P
紀上 1648P

1143P 857P
神祇 祭祀

「人か」といっている。
「人か」とおかない。
H27.7.4

御神火

東に聳える阿蘇の山へ近付くにつれ、次第に高
くたつてゐる坂道を行く。二、三十人ばかり

の行列があつた。

この集団の先頭には二つの輿があつて、そ

のうちの一番国には帰途についた。少彦名に

乗っており、もう一つには神祇祭祀を掌る

中臣の姿があつた。

先に述べたように

中臣氏は、菊池・山鹿あたりを本拠地と

し、阿蘇一帯をも所領としていた。

ように見受けられる。第十章へ後国内に置

かれた三十ばかりの国々の中

その他参照

阿蘇谷の谷底に立ち、天空を振り仰ぐと、中岳が

ら真黒の煙がモクモク立ち昇つてゆくのが

見えた。

神聖な神の川、黒川の清澄な流水に身を

沈めて様を被った後、少彦名らの一行は噴火
口を目指した。
■少彦名達は、赤褐色の熔岩が露出して
尾根伝いに火山礫が降り積もった山道を一
歩一歩踏みしめながら登りくぐりくぐり
やがて、噴火口近傍の山上神社に到着
た。なお、
火の山阿蘇を日神とて崇拝する考え
方は、この山里に人が住みはじめた時代に
遡るのであろう。人々は、身を洗めてこわ
ごわの山に登ったに違いない。
そして、中岳山上の最初の神殿は、地底か
ら噴き出た巨岩のもとに、簡単に作
られたのではなからうか。
恐らく、その水が山上神社の由来であろ
う。噴火を神格化した原始信仰だけに、その
創建年代は、もちろん分らない。
と、いう。(「北九州の旅」旅研社、'66・10・
20初版、二二頁参照)

AM1158
H16.1.23(金)
阿蘇神社
Telした。
0967-22-0064
「さん(よう)
(く)は」という由。
阿蘇神社の
神職者談
37621行

■なお

「この山上神社において、火を吐く噴火口そのものが神殿とされたため、曰く拝殿だけが建てられてゐる」

という。(「北九州の旅」旅研社、二一九頁

参照)

■ここに、肥後国風土記逸文「阿蘇岳」条をみると、阿蘇山についてこう記されてゐる。
「大き徳は巍々く、諒に人間に有一あり。奇しき形は杳々けく(遙かに広い)、伊、天

の下に雙なし。地の心に居在るが故に中岳と曰ふ。謂はゆる阿蘇の神宮、是なり」とある。

*要約すると、阿蘇の中岳が、いわゆる阿蘇の神宮である。

という。つまり、阿蘇の中岳が、神宮とみなされてゐた、というのである。

■そこで

前页2~4页


 噴火口を覗き込むと、
 その穴は、
 遙かに広くて、まさしく巨大な
 (膺) のよ

うてあつた。
その大^{いさばか}き徳は巍々く、諒に^{まこと}尋^{クル}て^{ひとのよ}人間にた
だ一つある句へり此のような奇^{めづ}しい形^{かたち}をして
眼前^{トル}に氣^きも遠^{とち}くなるばかりに^く広^{ひろ}がつていた。

すなわち、伊、天の下に雙なく、地（九州）の心に位置してあり、
 地（九州）の（真）中にある
 彼方の方まで
 想像されるのだった。

その噴火口は、阿蘇は九州の最中にある。その中央部分

の^が外周縁部^{いこうえんぶ}と対比^{たいひ}できそうだが、^カ第17回^{かい}図参照^{ずさう}）^カ外輪山^{がいりんざん}の形状^{けいじやう}はコヘソ凸

小町 18 回

カラー！真全面に、
限定一杯大きく。

2,614^P - 2/2



341

霧島高原

写真図版 424 阿蘇中岳 火山口
『熊本』日本の山河⑤天と地の旅、国書刊行会、昭和5年12月20日発行
表紙参照。

44-4.11(土) 5814P 5612P 5612P 茶化す 1434P 2,615P
 「ハス」 広1992P OK 指がえれ 5612-3/2P 大男の図 3048P-4
 1992P 10-20

■すなわち、御神火の山口神山は、洞巻くよう
 に見える。口線麻形は(方一丸)の皺のその中心
 といふべきである、といえよう。

①「臍」で茶を沸かす
 ②「臍」が茶を沸かす
 ③「臍」が宿がえする

■阿蘇の噴火口を「臍」に見立てた昔の人々
 は、おかしく、たまらない時や、はかげたこ

とと感した時等に、「臍」で「茶」を沸かす
 と茶化して言ったものと思われ。

■また予め述べると、近畿地方では、
 へ当初、臍を神山(三輪山)に見立

たか、後年、もつと臍と呼ぶに相
 応しい所を求めて、二度も別の場所へ移すこ

とになる。のであらう。と想像さる。 (第九十五章へあ
 なめあなめの項等において述べた)

*「言葉が生きたのかも知れない。」

の噴火口

はろ
すかい 1822 ②2638P

かんき
御前 元342P 常磐木 元1590P 2,616P

伊勢神宮62P 常磐木 元1998P 元2614P 9P
(立ち屋わ) 元2614P 9P

巨大な ②2614P 9P

阿蘇 元101P 156P

ゆうろう 小林
雄壮 1034P

雄壮
次郎
②2617P 14P

雄壮きわまりない阿蘇形(崇神記)の阿蘇
の噴火口から吐き出さる真黒の煙を眼前
に阿蘇の火種を拝受するに当つての御祓いの
儀式に没頭していた。
雄壮きわまりない阿蘇形の噴火口を
あつて、中臣は立ちつ坐りつ阿蘇の縁に
の神に祈りを捧げていた。
中臣は、常磐木の緑濃い柳の枝にとりかけ
た赤い御幣を幾度と知れず打ち振り、神の
許しを請ひ願うのだった。
続いて中臣は、背後に控える者達の方へ
歩を進めてゆき、神山の神の御前に額衝く少
考名らはいめとする大勢の者達の頭上に赤い
御幣をふり注いで、こしら全員の身を清ら
かにし、心を清浄にした。
なお、大和の三輪山のお祓い串の御幣は、
赤色である、という。(大神神社、中山和敬
学生社、一三七、一三九頁参照) 写真図版431
三輪山の赤い御幣は、火の国

④ $2638^{1/2}$

かつ
担 $\rightarrow$ 429

火口壁・火口丘(中央火口丘の略) 396P

地座 ⑤ 2613²/₂, 2619₂₉₉ 出

中32人衣
左雄輝 2246

いあら 元 P
硫黄 92

奥におい 1685 ~~対照~~ 1331

の御神火の山曰阿蘇山の火の色をあらわし

担^{かつ}ぎ^あ上^あげ^あられ^あて^あきた^あ御^み酒^{さけ}か^あ、
 噴^ふ火^か口^{こう}め^あか^あけ^あ

て 窪 か 水 た。
すりは うちょうきょたい
掘鉢 状の 巨大な 穴の 底には
あな そこ
巨大 261 93
何事も なく

無気味に静まり返って、
赤黒い岩漿水が、
きあがる黒煙の下、
縁部を赤く染めていた。

そいで、切り立つ火口壁の岩かけなどのい
たるところからシユーシユーと勢いきおいいよく噴出ふんしゅつ

白く水蒸気は、――真黒の煙と対

地の底から身体へ伝わる震動を喰ひ。

な
もの
~~た~~
か
た。

我に火種をお与え下さい

か、あたりに漂う一種異様な硫黄の臭

は鎖く鼻を突き、
その胸苦しきは火口の縁

昭和新年を思ひ出す

2618

電報
(つづ)

ゆう 2264
結う 1926
暖く 1388

2632 304

急峻 558

改行

に居てさえ耐え難いほどである。
まさしく、身を賭して、火種をとらなければならぬのだ。た。
少彦名は、やかて意を決し、
急峻な火口壁を下つていった。
黄白色の硫黄がバツトリへはり着いて、
て、白煙が噴き出して、
風は噴火口の向う側のほうへと吹いており、
黒煙が東の方へ棚引いていった。
足元を確かめながら、
少彦名の腰に着けた結い綱が、
次第に伸びていった。
あちこちの岩の隙間から吹き出す目に見えない地熱の熱気が音もなく突然襲いかかり、
硫黄臭は行く手を阻み、
人々と伝わってくる地響きは身を凍ませた。
偉大な火の神よ。我が母国を哀れみくだりて、
少彦名は心の内に祈りつつ、
無我夢中で下りていった。目は翳み、
頭はボーンといて、
果してどこをどうさ迷い、何をどうしたのか。

おかし 286^{のり} 祝詞 1753^{つし} 悔 1492^な 頭 157^{こう} 299^な
 とおびを 掲げる 371^{おかし} 最 294^{おかし} 押 垂る 299^{おかし}

2,619^P

たふ 座 1409^な 端 1922^な 新 2068^な 握る 1688^な 体 1511^な 漸う 2274^な 地底 2613^な

さ え 定 か で な かつ た。
 一 か し、地底 から 漸う の 態 で 這 い 上 が っ て き
 た 薪 が 握 ら れ て い た。
 精 も 根 も 尽 き 果 て て 火 口 縁 に 倒 れ 伏 し た 少
 彦 名 の 手 の 中 で、火 の 神 の 分 身 と も い う べ き
 そ の 小 さ な 火 は、一 条 の 細 い 煙 を 上 げ な
 か ら、頼 も く も 燃 え 続 け て い た。
 や や あ っ て、少 彦 名 は、ハ ソ 形 の 噴 火 口 の
 縁 に 端 座 し た。そ う て、深 々 と 額 を 地 に こ す
 り っ け、火 の 神 に 心 か ら の 謝 意 を 申
 一 述 べ た。
 「御 神 火 の 山 よ。た い か に 貴 方 様 の 火 種 を
 は、こ の よ う に 有 難 く 頂 き ま し た そ し
 傍 に は、共 に 慎 み 深 く 頭 を 押 し 垂 れ て 伏 し
 拝 む 中 臣 の 姿 が あ っ た。
 中 臣 の 祝 詞 が、厳 か に 流 れ て い っ た。
 二 に、少 彦 名 は、そ の 宏 大 な 噴 火 口 の 絶
 壁 真 際 に す っ と 立 ち、一 一 一 御 神 火 を 握 り
 し め た 手 を 高 々 と 掲 げ た。

差 延 べ
 巨 大
 2614
 97

561.7.3
H 11.1.2

大電
ひび
大振り

882^o

平伏寸 1905⁺
三日月 219⁰

 2.620^P

3(2")
30
7/6 186

厚のあ
炎层204

土の元
差(延ぶ 887)
(伸)

常元^元1598
117まで連続

振興局 1968

117 未だ継続中と

手中の御神火は、風を受けて、火の粉を散
 らしなから燃えていた。
 「膺形の神山の火の神よ。永遠な水。そ
 てこの小さな火の神よ。東の母国の膺とな
 り、常にえに燃え続け、我が母国をば幾
 くり守りたまえ」
 少彦名は、東の方へ差延べたその火
 を、大きく大きく振り回し始めた。
 頭上で炎は渦のような輪を描き、赤い火の
 粉は空を翔って四方に飛び散った。
 前で行なわれる火振り神事らの原型なのではな
 少彦名の瞶んだ目に、その御神火の光が、
 尾を引いて美しく輝いていた。少彦名は、泣
 いていた。
 感極まってその場に平伏した少彦名は、沸
 き上る喜びに泣き濡れながら、膺形の神山の
 神に、感謝の心を捧げ続けた。

加行なれでいる。(神社紀行「阿蘇神社」 学習研究社
二〇〇三年三月十三日発行「表紙」二頁参照)

離岸水

いさうな 1517P

2,621-1/2
紀上 156 提督 幸紀上 148P
大夫 紀上 328P
140, 148, 154, 156P

提督 幸紀上 148P
火船 204P
提督 幸紀上 1169P
具に 紀上 1496P
抱える

トール 御神火の火種を手にした少彦名
は、その火を慈み、まるで我が子を抱えるよ
うにして神山を降っていった。
これから後の天下の情勢の推移をこの
御神火の焔がつぶさに窺うてゆくことにな
るのであろう。
大夫中臣と倭国につてかけがえのない
客人少彦名とは、共に、阿蘇谷の東の
奥にそそり立つ高千穂峯（外輪山）を越え、
提督峯（九重の二上の峯）を左手に見つつ、
衣月穴の空國をがくと丘つがきの所を通って、
豊海の浜辺に出た。
ここにいまいよ、倭国ともお別れである。
少彦名は、火種を鄭重に捧げ持ち、船に
乗り込むと、――拘奴国討伐時における
とかなかる、又の再会を誓った。
「その日の来月のが待たしますし
船は母の根国へと続く海に浮び、元来た
道を辿るよ海路を辿っていった。」

H30(2018)6.30(土)~7.1(4回)
 H31(2019)2.8(金)~2.8(3回)
 令和元(2019)7.14(日)~7.15(3回)

2.621^P-2/2

令和2(2020)11.5(土)~11.7(4回)

2/5
 7/4
 1/7 1/6
 1/6

船中では、昼・夜となく、誰かが常に見張りして、御神火の無事を見守った。
 大切な火種が消え尽き、
 ように、細心の注意をはらいながら、
 少彦名らは、一路、東を目指し、
 曹に進んで行くのだった。

米

抱く 元117

こと P 2.622 - 1/2 待ち侘びる 元2082 様 元2201 元2594 - 3/2

②283-3/2 4行 ③3270

光り輝く神

一万、大己貴(天の葦原)は常世郷へ

かれるように去っていった少彦名の帰りを

氣を揉みながら待っていた

少彦名命は無事に倭国へたどり着けた

のだらうかし

邪馬台国の都での朝貢は果して、どう

だったのか

と氣になることしきりであつた

待って、待って、さらに待ち侘びた。

しかし、少彦名の乗った船が帰って来る氣

配は、全く感知らぬなかつた。

いったい、どうしたというのだ。もしか

したら、何事かあったのだらうかし

西の倭国に心を定めかせ、待つほどに

よいよ、大己貴は氣が氣でない思ひを募らせ

ていった

そのあけくは、大己貴の心のどこか片隅

30

$$2,622^p - \frac{3}{2}$$
$$\sim (\pm \text{人} \text{す}^n \text{い}) \text{とし.}$$

の
方
で
ん

「華やかな邪馬台国の都へ帰還した少彦名」

命が、東の鄙にたかな地、猶未だ王化さ小て

い
な
い
日
母
国
は
へ
戻
つ
て
く
る
な
と
い
う
ニ
と

は決してあるまい

とさえ思いうようになっていた

大己貴は、愁えて
口を言つた。

7 私ひとりで、このようにしてこの国を造

てゆけようか

なお、口古事記には、次のように記され

7
11
3
0

大穴牟遲おほあなむちと少名毗古那すくなひこなと、二柱の神相並ふたはしらのかみあひなら

ひて、この国を作り堅めたまひき。

しかる後、その少名毗古那の神は、常世の

国に度りまき。

この大、大國主の神、愁へて告らしく、

あれ独りして、
いかにかよくこの国を作

らむ。
いづれの神か、
あとよくこの国を相作

らむ

云々

2494

果(給ふ) 1791

2,623^r-1/2

なみき
波間 1671

とある。

*

ところがそんなある日、途中まで迎
えに出、いた早船が、
の方へ、漕ぎ向かつて来るのが、遠くの波間に
見えた。

やかて、かなたの沖のその小船から、声を
限りに叫ぶ声が聞えてきた。

船が帰ってきたぞー
少彦名命が、帰っておりでになったぞー

「そうか。さてもさても、よくぞ使命を果
した。給うて、この鄙の地へ還ってきてくれたも

のよ
大己貴は、母の根国(難波)の渚に立ち

方角をいって見つめつけけた。
茅渚海(難波の海)の一点、西南の

待たせと久しくして、その日の太陽が西へ

大きく

幻現 2753-2
 神神 2250
 夕焼 2250
 搭載 1316
 空 1567
 2,623 P-2/2
 淡路 2625
 波打 2625
 2625 P-1/2
 2622 1/2

傾きかけた頃、遠方海上に、ボツンとそ
 れらしい船が見えた。
 「見えたぞ」
 「あれだ、あの船だ」
 その一瞬、海岸線に沿って立ち並ぶ人
 々の間に、響動めきか沸き起った。
 「大己貴は、目を潤ませながら言った。
 「確かに、少彦命の乗った船ぞ」
 押し照る難波の海の沖に横たわる淡路島の
 山の端に向って落ちてゆく夕陽を背に負いな
 空の色をうつづいて
 がら、――神山、阿蘇山の御神火を搭載
 したその船は、ゆらりゆらりと浮んでいった。
 黄金色に染まった夕焼けの空。
 黄金色にキラキラと輝く幻想的な海原。
 その震しい光の中を、船はゆつくり近づ
 いてくる。
 絢爛華やかな神神、光につつまれた船。
 それは、七福神の中でも最も広く親しまれ
 ることになる。三輪山の神、大物主神、別
 名を大國主神とも國作大己貴命ともいうを

5775¹ 5778^{1/3} 2627^P

2.624^P

紀上128⁰ 2755^{1/2}

元(聖) 120^P

大元(聖) 75^P 紀上128⁰

乗せた船であつた。

■なお、参考迄に述べると、

①神武記に、

「美和の大物主神」

②神代紀上第八段一書第六に、

「一書に曰はく、大國主神、亦の名は大物

主神、亦は國作大己貴命と號す。亦は葦原醜

男と曰す。亦は八千弋神と曰す。亦は大國玉

神と曰す。亦は顯國玉神と曰す。云々」

とある。

■西方の天上の國から票い降り、次第は近

來る大神の神の船。その光景は、更に感

動的であつた。大國主命、大黒天など七柱の福德の

もつとも、七福神をこの物語の中に持

ち込めば、恐らく誂かしく思われるであ

ろう。詳くは、おいおい述べて申すであ

きたい。(第九十六章へ七福神へ他参照)

*

おぼろ
薄墨色

2,625P

ぼろ
没す 2042P

こうこう
煌煌 2736P

②2623-1/2 黄金色に染まった夕焼け
の空

天空の西のはおれへと落ちてゆく太陽は
刻一刻より一層美しく
一面をこの世のものとも思えないほど
色鮮やかに染め上げていった。
ーかし、
「ああ」
夕陽はやかて、低く連なる淡路島の山な
みの向う側へと、少しづつ、その姿を隠して
いつてーついに没して去った。
あんなにも綺麗だった黄金色の光は
ようよう急速に薄らいでゆく
まばらにばかりに輝いていた海原の巖かな光
もまるで泡沫のようにはかなく
夕色あせてゆく
そして、暮色の中にボウと浮んでいた船も
とうとうーーーーーふっと、掻き消え
たように見えなくなつてしまった。
こうしていつしか、空も海も、全てがすつ

3 元1620⁸ 夜陰 元2210⁸
燈火はつゝ夜はさびし

$\frac{2}{8} \times \frac{1}{6}$

$(\textcircled{8}) 2627^{\uparrow}$

$-\frac{1}{2}$

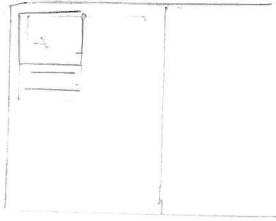
58

紙 130°

2,626^P-2/2

・カロー

・左頁の左上に
西に置いて下さい。



おほおほ^{おほおほ}は、^う浮かび来た神を
日本国^{みまのくに}の三諸山^{みまのやま} (三輪山) に
住ませた、という (紙 130°)

大己貴^{おほおほ}は、『後年^{ごねん}の日辺^{ひのへ}日本国^{にっぽん}』
(国譲り^{くにやうり}以前^{いぜん}の出雲国^{いづものくに}、現在^{いま}
の難波^{なにわ}・奈良^{なら}盆地^{ぼんち}一帯) に
居た、と推察される。



紙 130°

5778^P
-1/5

163

130°

1409

第333 図

^{うみ}海を^て光^うに^く浮かび^{かみ}来る神

『出雲大社に行こう』学研パブリッシング 2013年10月24日発行、39頁参照。・倭国から追放された素戔鳴^{すさな}の孫である。
・大己貴の髪形や服装が、この図のようであったとは考えにくい。(第7巻) 357

^{けだ 元690⁰ 神代紀}
^{なみうちまへ 元1670⁰}
 蓋し ^{あひは} 元1302⁰ 行へ 2,627⁰ - 1/2

^{ゆ 揺めく 元2263⁰}
^{へんげんしせい 変幻自在 元2002⁰}
^{さか 小林 1106⁰}
^{いやはは 弥栄映え 元18-411⁰}
^{さか 小林 2047⁰}

らしたまえし
 大己貴は、海を光りて依り来る神に向かい
 思わが身を伏せ、母国の弥栄映えの永久
 の繁栄を祈らずに、おれなかつた。
 海上の灯火は、いよいよ大きく燃え
 上り、火の粉を散らせながら、海辺のすぐ近
 くへとやってきた。
 変幻自在に揺らめく焰が、海原一面を真赤
 に染めていて、それはそれは鮮麗この上もな
 い。

新頁 95行 燈臺

大己貴は古事記では「大國主」は、その光り
 輝く神を迎えるため、波打際に歩み寄った。
 大己貴は、船中の少彦名に向かつて、
 「如何程待ったことか。今此の国を理むる
 は、唯一の吾一身のみとなり、もはや其れ吾
 と共に天下を理むべき者など、おそろく有る
 まいとさえ思っていたが、よくぞ戻ってこら
 れた。」
 と言った。（神代紀上第八段一書第六参照）

突き進んできた船が、難波の砂浜に乗り上げるようにして着岸した。

紀小87°
紀上130°

紀小87°大穴持②629°
宇治谷(山)45°

2,627°-3/2

かげ
陰云391°

おこ
巖か294°

れいき小井
霊気1044°

なうやう小井
燎燎614°

進んできた船が、難波の岸辺に乗りあげるよ
うに止った。
船の上に燎燎と燃える炎に照らされた少彦
名の真赤な顔には、たとえばようもなり巖かな
霊気が漂っており、
神懸いた声が聞えてきた。
「もしも私がいなかったら、おまえ一人で
どうしてこの国を平定できただろう
うか。
おまえの知らないこととはいえ、私が常に
陰ながら見守っていたからこそ、おまえはこ
の国を平定するという大功をあげることで
得たのだ。」
不審に思った大己貴神「大穴持神」は尋ねた。
「そう言うあなたは、
なんでしょうか。
「私は、おまえの幸魂奇魂（瑞祥と神霊の
魂）であるぞ。
幸魂奇魂に違いない。
——とおまへは、私の
ところでお前

紀上130^P 472^P 大物主

2624^P

「日本国」 紀上130^P 旧暦35^P 928^P 1/2

おほのほののの 大物主神 紀上130^P 128^P

2,628^P 75^P

紀上130^P

こと

はいつたいどこに住みたいのかし

大己貴の問に對えて、大己貴の幸魂奇魂

すなわち大物主神は、

「吾は、日本国の三諸山に住まむと欲ふ」

「私は、日辺日本国（近畿地方）の三諸山

（三輪山）に住みたいと欲う」

と言った。神代紀上第八段一書第六

「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版

「三輪山」「三諸山」参照

ここにところ、日左事記には、次のよう

に記されてゐる。

「あは、倭の青垣の東の山の上にいつきま

つ水」

「私をば、倭の青垣（生駒・金剛山系）の東の山

の東の山、三輪山の上に、身

を清めてお仕え申せ」という。

と答えて言われた、

「そこで大己貴は、神宮を三諸山（三輪山）

に造営し、この宮に大物主神を住まわせる

ことにした。大物主神は大己貴と

この物語では

と称しているのだろう。

大己貴と曰大穴持とを関連づけて

考えてみたい。

米

さて、青垣（生駒・金剛山系）の東の三輪

山の中腹に、拝殿が建設された。

また、神山（三輪山・三諸山）の山上には

阿蘇中岳の噴火口になぞらえた窪み（土手）

が設けられて、その窪みの内に、煉炭が置かれ

乾いた木片や堆く積み上げられた。

「神山（三輪山）の火よ。燃えて、母国を

守りたまえし

こうして、奈良盆地を見おろす秀麗な神の

山、三輪山の山頂に火が灯され、黒煙が

空を指してモウモウと立ち昇っていった。

その神山、三輪山の位置は、まさに「あ

のへソ形の阿蘇の神山の位置とピッタリ符合

していた。

つまりここに、東域の母国（川出雲国）に

左頁の上半分に
掲載。

2,630P 3/8

~~三輪山のな~~ 三輪山 2628P 3/2 三つ島 3293P

山の辺の道が結ぶ古社



字を消さないでよい。(ママ)

136G

146G

写真図版 425 三輪山 [三諸山] (467m)

2635P 3/2 15行

『大神神社・石上神宮』神社紀行(8) 学習研究社 2003年1月2日発行 表紙参照

126G

『山の辺の道』は、上つ道の東、奈良盆地の東縁を南北に通する約35Kmの古道である。『広辞苑』
く上つ道く山の辺の道参照 364 方向に蛇行しながら

2011年 秋の御用金 2609
H30(2018)6.30(土)~7.2(4回) 1/2 928-2/3 2,630-4/8
P 4/8

大神神社 42~43
145
93
神体 145
こと

重鎮 1050

IF

も、国の重鎮日へソロが造られたのだった。
地方の中心として、かつ信仰の山として、
これ以後、人々に厚く敬われ、慕われゆく
ことになった。
なお、大神神社は、
三輪山そのものが神体とされ、
本殿が無い
という点で他社と随分異なっている。
なにといい得よう。
阿蘇の山上神社にならうて、
三輪山自体が御神体とされ、別に神殿とい
うもの無く、三輪山麓に拝殿を造営する
にとどめられたのであろう。
と推察される。(第十二章へ大神神社の項に
おいて既述、要旨図版 425、426、大神神社の拝殿
へ大神神社の大杉玉参照)

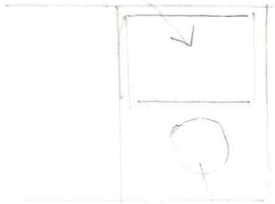
おきたま
杉玉
新やの
ー119P
(酒林ととも)

2. 630P-5/8

・カラー

・右頁の上半分に、
限定一杯はみ出で
掲載下さい。

・暗くならないよう、
注交して下さい。



概



上は、通宜カトリック
下さい

カ
ト

136G 半字P

146G

写真図版

※6行

426

おみわ

大神神社の拝殿

はいでん

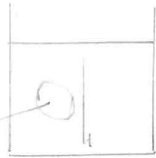
昭和45年3月28日発行

『神郷、三輪山』藤田勝重監修、同友館、1990年4月23日発行、口絵参照。

366P

・カラー
・右頁の下
に、大木
栽せ
下さし。

* 三西・酒造の
シンボル
です



木王

2,630P- 5/8

1964-11-19PT
新装(さかばり) 新装(さかばり)

木王



1464 写真図版 427 新しい大木王 (酒造のシンボル)

1364 『大神神社』三好和義・岡野弘彦、淡交社、平成16年2月13日発行、126頁参照。
1264 『大木王』第一編『出雲国の国造』において既述。

新装(さかばり) 新装(さかばり)

大木王 一家、一集

2,630P-7/8



カ
7
上

130G

140G

写真図版 428 飾り樽が積み上げられた大神神社拝殿

〔11月14日の醸造安全祈願祭〕

『大神神社』三好和義・岡野弘彦、淡交社、平成16年2月13日発行、126頁参照

13. 全国の酒造家の代表が参列。当日は拝殿に四斗樽が飾られ、社頭ではふるまい酒

・カラ ← かし行なわれる

・左殿の上半分に、限定一杯のみだして掲載下さい。

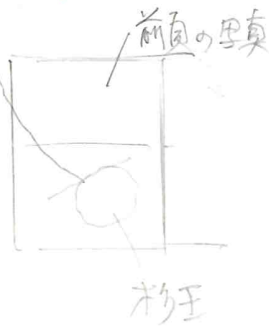
・暗くならないように御注意下さい。

平成26(2014)11、17、天皇、皇后が大神神社に参り、
丁度その日に徳田、11、18日参拝は、天皇参拝時、櫓を御覧下さい

2,630P 8/8

- ・カラー
- ・左頁の下半分に、
はみ出して大きく掲載
下さい。

- ・暗くならないようにして下さい。



写真図版 429 ^{すぎたま} ^か ^か 大杉王の掛け替え

『大神神社』三好和義・岡野弘彦 淡交社 平成16年2月13日発行 126頁参照 369

新や(1)-119P
杉王(はまきま)
酒井(さか)和1)

に読みとるとき、あたかも、
八出雲国は、広大な国であつた
という印象を受けるのであろう。

ともあれ、三三三年頃、
八難波からみて、青垣（生駒・金剛山系）
の東に位置してゐる三輪山みわやまの山上に、光
り輝く神が祭られた
と解した。

三輪山の御神火『その後の経緯』

それでは、三輪山の頂に燃え続けた御神
火（光り輝く神）は、一体、いつ消え尽きて
しまったのだろうか。

■定かでないが、あるいは、大己貴の幸魂
奇魂である神の光は、一徳朝の国内外
の混乱期に一旦途絶えてしまったのかも
知れない。

（後述）
そしてその後、三輪山山頂の火は、幾度か
繰返し、燃え上がったようである。（後
述）

（聖徳太子への金人の夢告以降）

2,632^p-1/4

2632^p-3/3 大神神社 高宮神社
214^p 高宮神社

2632^p-3/4 6年

だうう、噴火口を象じって作られた
三輪山の頂上の窪みに、小さな池に
火がともることはなくなった
と想像される。何時か不明ながら、
また何時か不明ながら、小さな窪みの中、
池の中に、大物主神の御子日向御子神
を祭る日高宮神社が建立された。
大神神社、中山和敬、学生社、七〇
二一四頁参照）写真図版 430 高宮神社
●もつとも、その摺鉢形の窪みに出来た小
な池は、早が続くと、すぐに干上かっ
うそうた。（土地の古老の話による）
●なお、古来、早魃の時、郷中の氏子が登拝し
て降雨を祈ればかならず靈驗ありとされ
り、今日でも神職参籠の上、登拝して祈
をおこなう慣例になっっている。
という。（大神神社、中山和敬、学生社、
二一四頁参照）

*

薪 1362

み 640

1399

2632-2/4

2633 2/5

それにして、少々気がかりなところがある

三輪山の頂上に

阿蘇の中岳の噴火口にみたてた三輪山の

頂上に窪みを作り、この窪みの中に薪を積み

上げて燃やせば、煙をたなびかせることが出

来よう。

しかし、大雨が降れば、たちまちで

その窪みの中に雨水が溜ってしまふ

雨の日にも薪の火が消えないように、何らかの工夫が凝らされていったものと思われ

あるいは、

三輪山山頂の窪みの底から、三輪山の中腹

へ通じる排水路が設けられていたのだろうか

三輪山の頂の窪みの

ほぼ中央部に、石や土を盛り上げて上面を平

らかに、窪みの外周縁よりも高いその盛り土

排水溝とみられる石組みの端

1744.2 (14)
紀上472

紀上472
雄略

神山 71-92
2590% 2895%
2633

2.632P- 3/4

71-21P

H11.9.23 (年)

あひ 高れり 255P

高宮神社 2632-1/3 65

高宮神社
2632 行
-1/4 6

(2) 版その跡地に 高宮神社が建てられたの だろうか (写真図)

の上で木々を燃やしたのかも知れない。
けそうすておけば、一、二、三とえ窪みが満杯
となつた後、さらに大量の雨が降つたとい
ても、その雨水は窪みの外周縁部から自然に溢
れ出すわけである。
などといふことが想像されるが、いふまで
もなく定かでない。

*

先に述べたように、大和国の三輪山は、時

として、日綜麻形山と書かれ、日ミワヤマと

呼ばれたようである。(万巻一、一九参照。
第四十三章へ大己貴と少彦名の談の項にお

いて既述)

また、

「三輪山を雷岳と書くこともある」

という。(「大神神社」中山和敬、学生社、

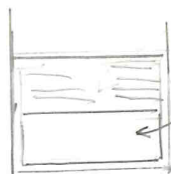
一五八頁参照)

そして、雄略紀七年七月三日条には、

「(三諸岳の)山の神をば大物主神と爲す

高宮
山上17FIII.

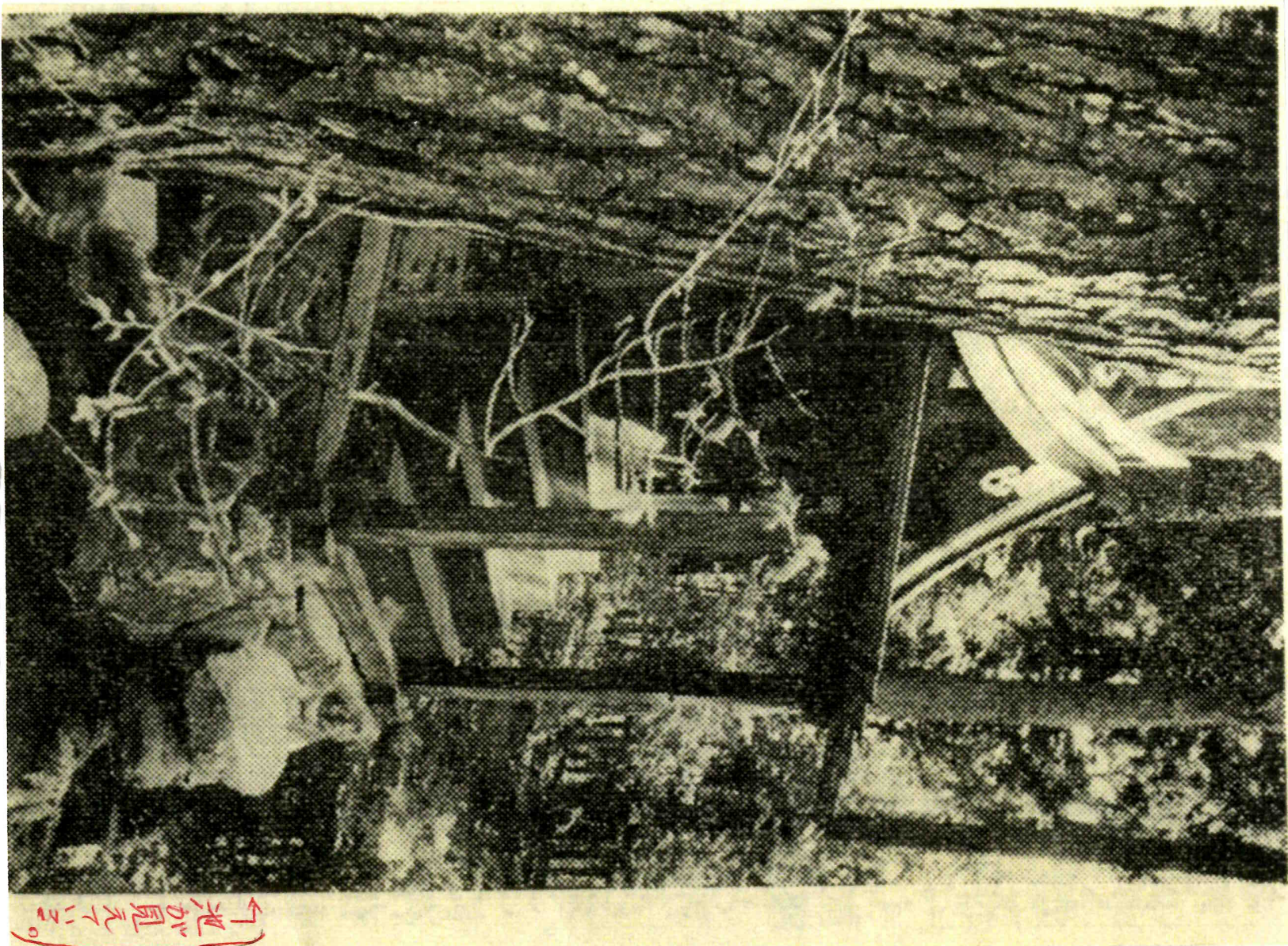
右側の右粉
上段・下段に
またが「大木
掲載下さい」。
* 上段にはみゆ
させ下211。



2.632^p - 4/4

4/4

2632^p 1/4 844



池が見えてニミ。
* 17FIII. 17FIII. 17FIII.

1304

1404

写真図版 430

三輪山頂上の

高宮神社

大御神社

中山和歌

学生社

昭和46年5月15日発行 70頁参照

高宮神社は

三輪山山頂

のいさな池の中にある

【日向御子の神を祭る】

2632^p 1/4 844

1744.2 (14)
紀上472^P

紀上472^P
雄略

神山 71-92^P
2590% 2875^P
2633^P 2.633^P

H11.9.23 (木)

あひ
溢れり 255^P
高宮神社 2632-1/3 14

2630
-3/8
三諸山

の^う上^きで^ぎ木^ぎ々^ぎを^ぎ燃^ぎや^ぎした^ぎのか^ぎも^ぎ知^ぎれ^ぎな^ぎい^ぎ。
そ^うう^うし^うて^うお^うけ^うば^う、^うー^うー^うた^うと^うえ^う窪^うみ^うか^う猪^う杯^う
と^なつ^た後^のに[、]さ^らに^大量^の雨^が降^つた^とい^ふ
て^も、^その^雨水^は穿^みの^周縁^部か^ら自^然に^溢れ^出す^わけ^であ^る。
な^どと^いつ^たと^いふ^想象^され^るか[、]い^うま^で
も^なく^定か^でな^い。
三輪山・綜麻形・雷岳・墨坂
度々述べたとあり、大和国の三輪山は、時
として「綜麻形」と書かれ「ミワヤマ」と
呼ばれたようである。(万巻一―一九参照。
第四十三章「大己貴と少彦名の談」の項にお
いて既述)
また、
「三輪山を雷岳と書く」ともある。
という。「大神神社」中山和敬、学生社、
一五八頁参照)
そして、雄略紀七年七月三日条には、
「(三諸岳の)山の神をば大物主神と爲す」

その跡地に、高宮神社が建てられた。
中山和敬、学生社、七の頁、高宮神社
の沿革参照)

2,634^{P-1/2}

2895^P

紀上199^P

と、記されている。
一方、神武即位前紀には、
墨坂に煉炭を置けり
とある。

これらの記事を重ね合せると、次のようになろうか。

① 綜麻形を置いて、時に地鳴りを起し、常に御神火が燃えている天上の国の神山に

(阿蘇山)に相当する山として選ばれた。日辺日本国(近畿地方)の青垣の東の神山(三輪山)は、脰の形が特にきわだっているわけではないが、日綜麻形と書いて日ミヤマと呼ばれ、日雷岳とも称

された。さうに思われる。

② さらに、大和国の三輪山の山頂に築かれた塗み

綜麻形を、炭を置ける土手、つまり

二五五
紀上199^P

煉炭とおかない

2630^{1/2}
959

H30(2018)7.1(日)~7.2(4回)
IF → H11.1.4.⑨

2.634 P 2/2

②2176 ②2226 ②2247 ②2630
末小林 240 大物主 448 大物主神紀エ472
55斤

口墨坂（坂は土手の意味）には
 幸魂奇魂（大己貴・大國主）の
 と解さ小得るように思われる。
 ＊なお
 「一説に、澤のまわりの障（土手）の
 き口坂（と）という
 と説示されて（第三十四章）懐妊の儀式の項に
 おいて既述）

の内側